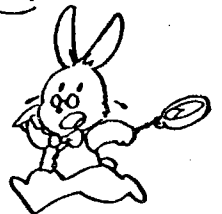


# 教育現場で思うこと(十六)

成末 肇士



中教審の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」についての第一次答申(平成七年)、第二次答申(平成八年)、「幼児期からの心の教育の在り方」についての中間報告(平成九年)についての概略を以上長々と紹介しました。今まで「ふかまのきりぎりす」で思うままに書き続けてきた私の思いと合わせて読んで欲しいと思っただけです。

中教審の第一次、第二次答申、中間報告の骨子(総論)は、次のようになります。

「教育は「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくむこと。能力、適応に依じた教育、個性を尊重することを基本とする。「生きる力」とは、自分で課題を見つけて、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し行動し、よりよく問題を解決する能力、自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康な体力をいう。そのためには、幼児期からの心の教育が重要で、特に「家庭教育」が「生きる力」の基礎的な資質や能力を育成する重要なものである。」

「実に素晴らしい提言です。私も総論には大賛成です。しかし、

その総論を具体的に実現するための方策には疑問な点が少なからずあります。疑問点を思うままに述べてみます。

第一、中教審の教育改革の方策には根本的な問題が欠けている。大学改革です。中教審は、「大学入試は学力試験の偏重を改め選抜方法、尺度の多様化を進める」

「『生きる力』の育成を目指す初等中等教育を尊重した大学入試に改善する」

と大学入試については言及していませんが、大学入試をなくすることは考えていません。それどころか、受験競争をおおろか、中高一貫教育の導入(とび入学制の導入)、(文部省もすでに認め、一部の大学では現在実施されている)を具体的に提言しているのです。

大学入試こそが諸悪の根源になっていきます。小学校にまで波及している学級崩壊、中学、高校生が起す問題行動等々、その根源は過度の大学入試競争にあると思えます。

大学入試で偏差値による大学ランキングが決められているのが日本の現状です。

生水は水道水でも飲料には適さない。歯磨きやうがいにも気をつかう。観光地や市内の至る所や田舎の小さな商店まで、ミネラルウォーターを売っている。我が国の井戸水のうまさ、ありがたさを、私はつくづく実感した。そして、日本々らしい豊かで美味しい水を贅沢に使っている国はないと思っただけで、夕刻、空を見上げると、種々な風が揚がっている。電柱もありみかけず揚げ易いのだと思いが、何かゆったりした気分になり、

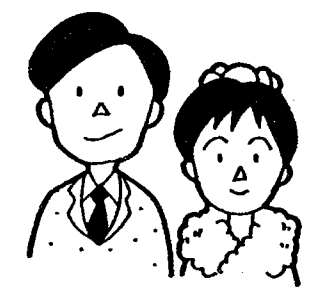
## 春夏秋冬

梶谷マサヨ

ふりむけば 戦中戦後を 生き抜きて 不況の風に 又も会いぬる

小春日に タンスの整理 思いたち 四ツ身の着物 暫し見て居り

主なき 三度目の正月を 迎えたり 屠蘇の匂も 忘れたる今



よい大学、一流大学は入試が難しい大学です。企業も出身大学を目安に採用すれば無難だと考えています。難しい試験に合格したのだから仕事もまあできるだろうと思うからです。

親も必死で一流大学を子供に期待します。受験競争では偏差値よりしかないので。知識知識(役に立たない)の詰め込み競争になるのです。入試改革に対する私の考えを次号で述べてみます。

## 新「ゲートボール場開設」

中組 岡本義弘さんのご好意で、町民会館東の農地を無償で貸与して頂きました。ゲートボールに限らず、多方面に活用できます。大切に使用ください。ご使用後は、元通りに整理しておいて下さい。

尚書 森本 忠



今回の旅では、シンガポール経由で五ヶ所の空港で離着陸を体験したが、機体が無事着陸すると、ホット安堵した。

帰宅し、溜まった新聞を整理しているとき、次のような記事の見出しが目に入った。

「マレーシア小型機墜落十人死亡。京大教授ら日本人は二人。」

帰国して間無しに、インドネシアの森林火災で、煙霧(スモッグ)が深刻な大気汚染と健康被害を引き起こしている、新聞やテレビなどで報道されだした。

(完) ▲▲

行事名	日時
● 小学校(幼)	
▼ 始業式	七日
▼ 給食開始	八日
▼ 身体測定(幼)	八日
▼ 集金日(小・幼)	八日
▼ 身体測定(低)	二日
▼ 同(高)	四日
▼ 新春ふれあい(準備)	二日
▼ 同	三日
▼ 新春ふれあい広場	二四日
▼ 誕生会(幼)	二七日
▼ 竹馬大会	三〇日
▼ 下町内会	
▼ トンド(準備)	九時
▼ 同	八時
▼ トンド祭り	一〇日
▼ 惣佛法要	一四時
▼ 連合体育部	
▼ 市ビーチボール	一七日
▼ 消防団	
▼ 出初訓練	一日
▼ 出初式	一日
▼ 尚寿会	
▼ 新年宴会	一日
▼ 女性会	
▼ 新年宴会	一六日
▼ 親睦会	二一日
	二九日
	八日



昭和三〇年代、日本の成長分野は「防衛・住宅・教育」だと言われた。冷戦時代の日本の安全確保の課題から防衛関連産業が買われた。一もはや戦後ではない」と経済企画庁が三〇年代初期で謳い上げたのもこの時代。衣食は足りたが住環境は戦後の延長線上、大きな伸びが期待され、その通りとなった。残るは教育、これも高学歴が社会需要に応ずる軌道であったことに間違いはない。▼今後はどうか。私の独断と偏見で言わせてもらえば、「情報・環境・福祉」の各関連分野であると思う。いずれも私達にとって重要な分野だが、とりわけ高齢と障害関連は福祉の要、緊急を要する分野。▼それにしても、福祉分野(厚生省管轄)は医療を含め不祥事が多い。特別養護老人ホーム関係では西本願寺派の福祉法人が名乗りを上げた?のには我が耳を疑った。県内でも昨年因島に続いて海田でも発生した。▼こんな不正がまかり通る福祉分野。チェック体制はどうなのか。内部チェックに多外部・市民の期待に行政がどう応えるか、応えられるか。

## インドネシア(ジャワ)・バリ島旅行記

旅の余話

高崎 壽郎

まず目につくのは、空港、観光地、ホテルなどに日本人が多いことである。若い人も結構多い。まるで国内を旅行しているような錯覚をする。

それに日本製品の多いこと。特に車が街に溢れている。関税の関係が随分高価で、オートバイ100ccが三〇万円もするとか。自家用車になると庶民にはなかなか手が出ないらしい。社長クラスで月収二〇万円とか、一般大衆の月収は一万円前後。それでも、若者は月賦でオートバイを買って乗り回す。

インドネシアでは、乾季(四月〜九月)と雨季(十月〜三月)がはっきりしており、家の建築にも影響する。我が国では、まず屋根を葺いて建てていくのが普通だが、ここでは、乾季には雨の心配が無いので、下から上へと建てていき、屋根は一番後まわし。

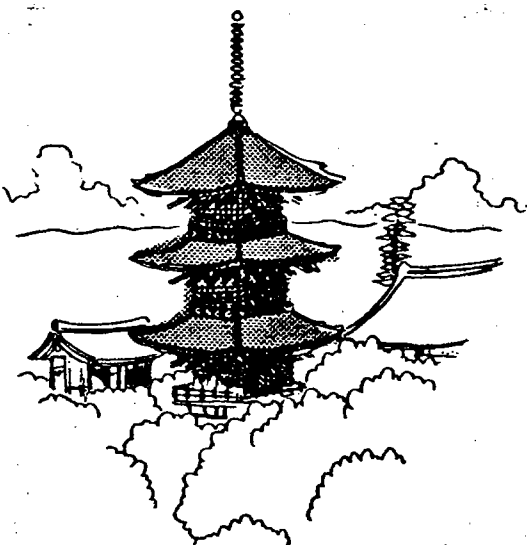
修学旅行の思い出 (6)

西永 隆典

五月一四日木曜日の朝、隆景広場の西口にみんなが集まりました。ぼくは、とてもわくわくしました。八時十四分発こだま六百十号に乗って行きました。新大阪まで二時間六分もあるのびました。スピードで、女子全員負けてしまっても悔しかったです。小さい時に、一回だけ大阪に行った事があるんだけど、ほとんど覚えていないのでわくわくしました。

新大阪に着くと、バスガイドさんがバスの止まっている所まで案内してくれました。しかの絵の描いてあるバスに乗って海遊館に着くと、すぐお弁当を食べました。お弁当を食べた後すぐ回遊館に入りまして。中に入ると、いろんな魚がいました。アザラシやイルカ、ラッコにペンギンがたくさんいました。大きな水そうには、マンボウやコギリエー、ジンベエザメもいました。一番ものすこかったのはジンベエザメでした。ジンベエザメと一緒に写真も撮れてうれしかったです。

ぼくはその絵を見た時、おしゃか様はとても勇気があってすごいなと思いました。ぼくだったら絶対出来ないと思います。次に、東大寺に行きました。大きな大仏ビルシャナブツを初めて見た時びっくりしました。東大寺に行ったら、ホテルさるさわに行きました。ホテルさるさわに着いたら、すぐに部屋に上がって荷物を置きました。その後夕ご飯を食べました。夕ご飯を食べた後、すぐ買い物に行きました。買い物をする時、どんな物が売っているのか、わくわくしてたまりませんでした。



なったのでみんなでおふろに入りに行きました。おふろから出た後、はみがきをして部屋に帰りました。そして、みんなでおふろをひいて十一時三十分になったので、ぼくはねました。次の日、六時に目がさめました。みんな起きた後、みんなでおふろをたたくました。それで、六時三十分朝ご飯を食べ、荷物を持って外へ出ました。外へ出たら、もうバスガイドさんがいました。バスに乗って出発しました。

次に、二条城に行きました。二条城はうぐいす張りがあって静かであるうぐいすみたく、な鳴き声が聞こえるからとても不思議だと思いました。次に金閣寺に行きました。金閣寺の中には入れなかつたけど、写真が撮れてよかったです。最後に東映映画村に行って写真を書いて昼ご飯を食べました。そして、雄一君と一緒に行動しました。

せんでした。雄君と一緒に何をかうかまよいながら、楽しくおみやげを買いました。それから、ホテルにもどって男子全員でおみやげを見せ合いました。九時五十分まで、おやつを食べたり、女子とウノをしました。そして、九時五十分になりました。

東映映画村に行った後、京都駅からひかり百二十一号で福山まで帰りました。福山でこだま六百三十七号こだま広島行きに乗りかえて帰りました。とても楽しい修学旅行になりました。(完) ▲

「ふかまのまど」

を読んで

Y・高森 (六〇代 産 産)

前略  
如水館、今度は女子マラソンが全国大会とか、どのようにして、全国レベルに到達したのか、野球と共に不思議に思っています。以下略 ▲



三次市 M・S 生

修学旅行の思い出。子供から大人に又、月日が立つにつれて誠になつかしい思い出になるもんですね。何時迄も、思い出となつて残るものです。其の為にも健康に注意して、一日でも長くこの世にお世話になる事が大切であります。自分の思う様には中々行きませんが、少しでも気をつけられればなんとか行くものではないでしょうか。お互いにこの世に生きて行く限りに常日頃から、思い出をつくる様にしたいと思つて毎日暮らしたいものです。(八十歳 男性)



三十四才頭の八分が

年が格高は年が歳

深町の世帯・人口推移

年月	世帯数	人口
九三・七	二八七	八九六
九四・四	二九五	九〇五
九四・十二	三〇四	九二二
九五・十二	三二一	九八三
九六・十二	三一九	九六七
九七・十二	三三三	九九四
九八・四	三三〇	九八五
九八・九	三三三	九九五
九八・十一	三三七	一〇〇五

深町の人口が千人の台台に乗りました。(三三三三三三三三) 九四年(平成六年)四月如水館高校が移転開校、県道太郎谷バイパス開通と環境が整備され、九四年四月からの四・七年で百人(約10%)増えました。新しい町づくりに結びたいものです。